新・仮面ライダーディケイド

冬蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新・仮面ライダーディケイド

【Ｎコード】
Ｎ８１６８Ｍ

【作者名】
冬蜜柑

【あらすじ】
主人公【三神ツバサ】はある日【仮面ライダーディケイド】となり、なのはの世界へと飛ばされた……
新たなる世界の破壊者の物語が今始まる。

プロローグ上（前書き）

はじめまして冬蜜柑です。
今回が祝初投稿ですのでどうか寛大な目でお読みください。

プロローグ上

三神ツバサ……彼は不思議な少年だ。
見た目は普通の中学生だが、異様な雰囲気を放っていた。
常人では考えられない様な驚く事をしたり、逆にしなかったり……
故に彼は《奇跡を起こさない魔術師》や《理詰めの超人》などと呼ばれていた。

この物語はそんな彼の物語である

――ある日

「ふう、どうも誰かに見られてる気がするな」

日本人らしい黒髪黒目に中学のブレザーを着こなす彼こそこの物語の主人公《三神ツバサ》だ。
彼はある事に悩んでいた。

何者かに見られている、感じがするのだ。

確かに同級生の間では頭一つ飛び抜けて格好良く、細身だが決して女と見間違える程では無い。なら女性か？
いや、そんな良い意味の視線では無い。
こう……禍々しいというか、憎悪？に近い感じだ。

「……どうにかしないとな」

ツバサはそう言い肩から掛けていたポラロイドカメラのシャッターを切る。

「……今回もダメか」

そう言い映した写真を見る
不思議な事に彼が撮る写真は全てピントがズレ、全体が歪んでしまう。

「おかしいな。カメラは壊れて無いのに……」

深い溜め息を吐き、ツバサは帰路に就く。

「ただ今……って誰も居ないけど」

彼の声が虚しい程に空の家に響いた。
この家に彼以外は住んではいないのだ。兄弟はいなく、両親も死に親戚はいない……彼は言うなれば天涯孤独。
だが、彼はその事を悲しんだりはしない。いや、何時からか彼は悲しむという事をしなくなった。

慣れ……と、言えば聞こえが悪いかも知れないがある種の自分の感情に鈍感になった。思いっ切り笑ったり思いっ切り泣いたり等はしない。
彼はただ、《無》という感情が大き過ぎるのだ。故に彼は変化を求めてる。
そう、世界が変わる程の変化を……
彼はポラロイドのネガを詰め替え、早めの夕食をとる。

「……モグモグ」

彼一人だから会話は勿論無い。
ただ彼の食べる音だけが木霊する。

「さて、片付けるか」

ツバサが席を立ち、食器を流しに持って行こうとした時、それは起こった。
周りが暗いのだ。
単なる停電では無い。文字道理、漆黒に包まれた。ここは……そう、TVで見た宇宙に似ている、が、そんな訳が無い。呼吸出来るし、生きている。

「まさか白昼夢？」

「それは面白い意見だね」

「！！」

ツバサが声のする方を見ると、そこには今時の服装にクリップで髪止めをした独特のセンスをした青年がそこに居た。

「誰だお前！？だいいち此処は何処だ？」

「僕を知らない……おや？まさか前任の【ディケイド】と接触していないのかい？」

「ディケイド？なんだそれは？」

「まさか早く来すぎたのか……。僕の名前は【フィリップ】前任のディケイドから【バックル】と【カード】を受け取ったらまた来るよ」

「おい！こら！待て！！」

ツバサがフィリップの肩を掴もうとした瞬間、彼は消えた。

「いったい何なんだ？」

———翌日

「昨日のはいったい……」

頭を抱えながら学校へと向かう道、ある変化に気付いた。みんながこっちを見ている。

意識過剰とか、気のせいなんかじゃ無い。殺意の目でこっちを睨んでる……

「うぎゃあああああ！！」

「！！？」

道を歩いてた３０代サラリーマン風の男がツバサに襲いかかった……

つづく

プロローグ下

これまでの新・仮面ライダーディケイドは……

「どうも誰かに見られてる気がするな」

「白昼夢？」

「僕の名前はフィリップ。また来るよ」

――――――

―――

―

「な、なんだこいつは!?」

「しゃあああああ!!」

男は牙を剥き、ツバサ襲いかかる。ツバサは軽く避け、男は壁に激突した。

「もう我慢出来ねー!!人間殺す!!」

そう言うと男は脱皮するみたいに人の皮を破り、緑色の蛹の様な生物【ワーム】が現れた。

「な、なんだこいつ!?」

ツバサは驚いたと同時に冷静にその場から逃げた。そのツバサを物凄い勢いで追って来るワーム。

もう少しで捕まる。と、思われた刹那！咄嗟に近くにあった鉄製のゴミ箱を手に取り、ワームに向かって投げた。

ゴツっと嫌な音がしたが、それはワーム。平気そうだ。

ツバサは小さく舌打ちをし、路地へと逃げ込む。

「何だよ！人間殺しても良いのかよ！！」

ワームに触発されたのか、あるものは体から砂が流れでて【イマジン】と呼ばれる人間の記憶（イメージ）により怪人としての肉体を得た生物が現れた。

「どういう訳だ？」

ツバサは影からその様子を覗く。

ある者は灰色の怪人【オルフェノク】に、ある者は妖怪と2種類以上の生物の特性を持つ、いわゆるキマイラ的な外見の怪人【魔化魍】に変化した。

「普通の人間が……いない？」

そう、見まわす限りの怪人、怪人、怪人、怪人、怪人、怪人、怪人、怪人、怪人、怪人、怪人………

動悸が止まらない。止まらない。止まらない……

どうすればいい？見つからずに逃げれるか？不可能だ！しかも何処に逃げればいい！？

ツバサは頭を抱え、しゃがみ込む。

するとどうだろう？ツバサを灰色のオーロラが通り抜けると世界が暗闇に覆われ、フィリップと出会ったあの不思議な空間へと導かれた。

「おい！フィリップ！いるのか！！？」

声を荒げてみたが、フィリップは現れない。

「フィリップならいないぞ。あいつは案内人で、【ディケイド】では無いからな！」

「！！？」

振り向く先にはトイカメラをツバサと同じ様に首から下た青年が立っていた。

「お前が俺の後任か……どうやらディケイドになるヤツは俺様と同じイケメンらしい、な」

そう言い青年は人差し指を立て、そう台詞を吐く。

「ディケイド……？」

「そうだ、ほらよ！」

「わっ！」

青年はツバサに向かって特殊な紋章（ライダーズクレスト）を象ったバックル【ディケイドライバー】とバックルと同じ物質で造られた本型の【ライドブッカー】を投げた。

「これは……？」

「これでお前がディケイドだ。」

今からがお前の物語が始まる。まっ、せいせい楽しむんだな！」

そう言い青年は立ち去る。

「ま、待て！お前はいったい……」

ツバサの問いに青年はツバサに向かい指を差し

「俺の名前は【門矢士】
お前の前のディケイドで……何時までも通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！」

そう決め台詞を言い、彼は姿を消した。

「楽しめ……か」

いつの間にかツバサは元いた場所に戻っていた。

「しゃあああああ！！いた！人間だ！！！」

「しゃははは！！殺す！殺すぞぉ！！！！」

怪人達は久し振りの人間に歓喜し、ツバサに詰め寄る。
そんな怪人達にツバサは鼻で笑い

「簡単に言ってくれるぜ」

ツバサはバックルをへその辺りに押し当てるとベルトが伸び、装着される。

「だが……」

ツバサはライトブッカーを開き、DECADE（ディケイド）と書かれたマゼンタ色の超戦士のカードを抜く。

「面白い！変身！！」

バックルを横に引き、カードを挿入する。

《KAMEN RIDE！》
《DECADE！！》

９つの影がツバサに重なり、その姿を変える。
顔は緑色の複眼にカード状の板が刺さり、まるでバーコードの様に。
身体は《十》や《？》にも見える白と黒のラインが入る。
これがツバサのもう一つ顔、【仮面ライダーディケイド】だ！！

「で、ディケイドだと！？」

「き、聞いてねーよ！！」

慌てる怪人達。

「これで少しは楽しめそうだ
フン！！」

ツバサはワームを蹴り飛ばす。するとワームは脱皮の様に成虫体になり、超高速移動（クロックアップ）能力を発動！正に目にも止まらぬ速さで移動する。

「ちょこまかと」

《KAMEN　RIDE！》
《KABUTO！！》

ツバサは新たにカードを挿入する。すると虫の羽根音に似た機械音が響くと真っ赤な太陽の様な甲虫を象った超戦士へと姿を変える。

「これで五分と五分だ！」

《ATTACK　RIDE！》
《CLOCK　UP！》

新たなカードを挿入すると、タキオン粒子が全身を駆け巡り、時間流を操作する。
空間が段々ゆっくりになり、ツバサもワームと同じ時間へと身を落とす。
ツバサはライトブッカーを剣型の【ソードモード】へと組み換え、ワームへ斬りかかる。

「はっ！」

剣道なんてした事の無いツバサだが、見事に体重の入った重い一撃を喰らわせると火花が散る。
ひと通り敵を斬ると、元の時間流に戻り、ワームは爆発し、その場には緑色の爆風が舞う。

「初めて使ったのに、初めてじゃ無い気がするな……」

デジャヴの様な感覚を覚えるツバサ。
ちなみにだが、ツバサの前のディケイド（門矢士）が全ての仮面ライダーを一

度破壊した事で彼の時みたく、二度と仮面ライダーは破壊されない。
『あ、おまけを忘れてた。受け取れ！』
何処からともなく士の声が響くと、灰色のオーロラからディケイドに似たバイク【マシンディケイダー】が現れる。
「……免許無いけどいいのかな？」
少し悩んだツバサだが、そのままマシンディケイダーに跨り、マフラーを噴かす。
数m移動するとよく見た人物が立っていた。フィリップだ。
「やあ、どうやら無事に変身できたみたいだね」
ツバサはバイクから降りて変身を解き、フィリップに詰め寄る。
「いったいどういう訳だ！？仮面ライダーはなんだ？なぜ普通の人間がいないんだ？」
「……君は僕に似ていると思っていたんだが、どうやら僕より翔太郎の方に似ているみたいだね。実に興味深い」
「話をそらすな！」
「おっと、すまない」
少々自分の世界に入り込んだフィリップは一息つき、説明を始める。
「全てを話そう。まずこの世界は【悪の世界】全ての怪人と悪意が

生まれ、全ての世界に侵略をせんとする世界。
その怪人を倒すために生まれたのが仮面ライダー達だ」
「まるでＳＦだな」
ツバサの言葉に笑いを含んだ表情で「そうだね」と同意する。
「つまりこの世界に人間は居ないんだよ」
「ま、待てよ！　じゃあ……」
俺は？と言おうとしたツバサの言葉をフィリップが遮る。
「君は破壊者だよ。　この世の誰よりも強い怪人であり……仮面ライダーだ」
「破壊…者？　怪人……？　何だよそれ……」
絶望が彼（ツバサ）のスタートだった。
「また会おう。　ディケイド」
そう言うと二つの灰色のオーロラが現れる。
一つはツバサを、一つはフィリップを通り過ぎる。
「ふぃ、フィリップ！　まて！　まだ聞きたい事が……」
「また、ね」
フィリップは意味深な台詞を吐き、姿を消した。

「こ、ここは……？」

ツバサは新しい世界へと飛ばされた。

つづく

出会い（前書き）

この小説の主役級の仮面ライダーは全員何処かのマンガ、アニメの主人公です。
なのでちょっと無理のある設定ですが、ご了承下さい。
ちなみにサブライダー、敵ライダー、W、OOOも出演予定です。

出会い

これまでの新・仮面ライダーディケイドは……

「何時までも通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！」

「免許無いけどいいのかな？」

「君は破壊者だよ。この世の誰よりも強い怪人であり……仮面ライダーだ」

――――――――

―――

―

「何処だ……ここ？」

ツバサはいつの間にか普通の町の一角に飛ばされていた。

後ろを振り向くと、どの町にも一軒はありそうな写真館が建っている。とりあえず入ってみたが、誰も居ない。

ふと机の上を見ると何やらメモが…どうやら俺宛てみたいだ。

『これもオマケだ。好きに使えばいいｂｙ士』

「好きにしろて……俺は仕事は出来ないんだが」

やれやれと呆れ、椅子に座る。

「あ、学校はどうするかな」

翌日、写真館の奥にある簡易ベットで寝起きしたツバサはある異変

に気付く。机の上にブレザーの中学生用の制服とツバサの学生証、財布が置かれていた。

「着て行け、て事か…仕方ない」

ツバサは服を着て家となった写真館を後にした。

「《鳴海中学校》か、行き先が分からん」

さてどうするべきかと考えていたら長い茶色い髪を二箇所で結んだ小学生ぐらいの少女が居る。ちょうどいい。

ツバサは少女に話し掛ける。

「ちょっといいかい？」

「にゃ！？何の用ですか？」

「鳴海中学校てどこ？」

「あっ、ここを真っ直ぐ行った所、です／／／」

少女は顔を赤く染め、そう答えた。

「（凄くカッコいい人なの／／／／）」

「そう。ありがとう」

軽く頭を下げ、少女に教えられた道を歩き始めた。

「ここか」

鳴海中学校は結構なマンモス校でかなり大きい。校門には風紀委員と書かれた腕章を付けた何人かのゴツイ学生が立っている。近寄ると何やら揉め事があったみたいだ。

一人は金髪に碧い目をした黒く膝まで丈の長い学ランをきた不良ぽい学生。

一人は黒髪にトンファーを構えた風紀委員を束ねた学生。

あからさまに火花が知っている

「《うずまき　ナルト》、何時になったら正規の制服を着るの？」

「《雲雀（ひばり）　恭弥（きょうや）》、別にいいだろ？元々この学校は制服、私服自由だってばよ。ならこれが俺の私服だってばよ」

「目障りなんだよ」

「俺は今、お前が目障りだってばよ」

恭弥は米神がピクッと反応する。

「ワオ、僕にそんな暴言（セリフ）を吐くなんて……咬み殺す！！」

恭弥がトンファーを振り上げ、ナルトに襲いかかる。ナルトはやれやれと長い裾に隠したクナイで恭弥のトンファーを受け止める。

「そんなカッカするなってばよ。最近毎日俺に突っかかってくるじゃねぇーか」

「それは君が僕の攻撃を止めるからだよ」

どこか楽しそうに恭弥は答えた

「まったく戦争狂（バトル・マニア）が！！」

「ついていけねーっ」

ツバサは隠れながら職員室に向かった。

「すみませーん。今日転校して来た三神ツバサです」

「お！君が転校生か！」

見るからに熱血タイプのジャージ着用の先生が呼び掛けに応えた。

「それじゃあこのままクラスに行くか」

「はい」

先生の後に付いて行くと《2年？組》の前で止まる。

「それじゃあ呼んだら来てくれ」

「はい」

余りにも淡泊なツバサの返しに先生はちょっと複雑そうな顔をする。

教室は賑やかだったが、先生が入ると途端に静かになる。

「えー。今日、このクラスに転校生が来る！！」

「おぉー！！」っと歓声が湧く。

「それでは、入ってくれ！」

クラスの全員がドアに視線を集中する。
ツバサはサッと教壇の前に立ち

「三神ツバサ。好きなモノは写真、嫌いなモノはナマコ……以上」

……しーん

「み、三神。他に無いのか？」

「別に…」

余りにも素っ気ないツバサの台詞にクラスの全員が驚き、戸惑う。

「それじゃあ三神の席は……沢田！手を挙げろ！」

「は、はひ！（噛んじゃった。恥ずかしい／／／）」

手を挙げたのは逆立った蜂蜜色の髪を持つ何処かビクビクした少年だった。
ツバサは少年の隣の席についた。

「よろしく。……ええと」

「あっ、オレ《沢田（さわだ）　綱吉（つなよし）》！！よろしくツバサくん！オレの事はツナって呼んで！」

「よろしくツナ。あ、くん付けしなくていいよ」

軽く微笑みながらツバサはそう返した。

「（最初は怖い人かと思ったけど、良い人そうだ）」

ツバサの返事にツナは何故だかとても嬉しかった。最近嫌な事が続いたせいもある。

ダメツナなど不名誉なあだ名をつけられ、イタリアからは変な家庭教師が来るなど、《普通の》友達が、なぜか嬉しかった。

そんな事が有りつつ、授業は進んだ。

元来俺は頭がいい方なので、勉強はスムーズに進んだ。問題は四時限目の歴史だ。俺が元居た世界とは大分かけ離れていた。

まずアメリカが無い。ブリタニアと訳の分からない国になていた。

次に遺伝子操作された新人類（オルフェノク）《コーディネイター》の存在。超能力が科学によって解明され、能力開発を時間割り（カリキュラム）が組み込まれ、他に錬金術などＳＦチックな事を真面目に教える先生に必死でノートをとる生徒達

「（どうやら本当に楽しめそうだ……）」

ツバサは誰にも気づかれずにほくそ笑んだ。

つづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8168m/

新・仮面ライダーディケイド

2010年11月2日13時55分発行